

# 石落の花

広津桃子

網野菊さんと私



# 石<sup>つ</sup>落<sup>わ</sup>の花

網野菊さんと私

広津桃子

石<sup>っ</sup>路<sup>わ</sup>の花 — 網野菊さんと私

昭和五十六年三月三十日 第一刷発行

著 者 広津桃子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一二二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 一三〇〇円



落丁本・乱丁本はおとりかえます。

© 広津桃子 一九八一年 Printed in Japan

## 目次

I

石路の花

紅椿

9

米食いねずみ

92

II

志賀直哉先生と網野さん

123

同級生

160

花の縁切寺

174

一周忌のことなど

189

宣徳赤絵 — 志賀康子夫人の面影

206

ともしび

215

網野菊年譜

221

あとがき

237

装  
幀

鈴木美江

# 石<sup>つ</sup>落<sup>わ</sup>の花

——  
網野菊さんと私

冬支度するもひとりや石<sup>つ</sup>落<sup>わ</sup>の花

網野菊

I



## 石路の花

網野菊さんは、明治三十三年、東京、山の手の町で馬具製造販売業をいとなむ家に生まれ、少女の頃から作家を志して、十六歳で秀作「二月」を書き、その後、志賀直哉氏を終世の師と仰ぎ、七十八歳で亡くなるまで、私小説一筋に貫き通してきた作家である。

その語るところは、己れの家系、生い立ちであり、幼い日実母との生別以来四人の母を持つことになった境遇であり、又、少女期の眼ざめや青春期、そして恩師とのめぐりあい、結婚、離婚、戦争期の生活、独り居、老年にはいった女の屈折した心の悲しみ、そのなかに慰めを見出した芸能の世界と、けてして広い視野に立つとは言えないが、それだけに又根深さを感じさせる数々の作品を残して、五十三年五月十五日、その生涯を閉じた。

網野さんの描いた一篇、一篇の物語は、長くはないが、それらを年代順に追ってゆくと、明治の後半、まだ姦通罪などという女にだけ責めを負わせる罪があった頃、貧しい実家への金の工面から、店の男とあやまちを犯し、そうした罪名を負った実母から引きはなされた幼い女の子が、どういふ思いを抱きながら成長してゆき、その生涯をいかに歩いたかを語る一つの物語をみる思いがする。作者の筆が生活と密着し、克明であるせいか、あるいは作者の意図しなかったかもしれない時代のすがたや、街のたたずまいが色濃くうかび、そのなかに生きる人々の喜怒哀楽と一つになって、読む者の心に深い印象を残す。かつて私は、網野さんに語ったことがあった。一つはまとまった短篇でありながら、互に連関し、複雑な人間関係がからみあう一族のなかで、初心で正直な独自性を失うことなく、長い年月を歩き続ける女主人公がうかんできて、一種の長篇を読む思いがすると……。

「そうですね。黒田さんというロシア文学の人から聞いた話だけど、ロシアにはそんな長篇があるっていうの。でも、私のは意図的にそうしたわけじゃあないんです」

網野さんはいつもの調子で、無造作に答えたが、そう言われることを、肯定しているかのような口吻であった。

「身边小説も、私自身は、決して棄てたものではない、と思っている。なんとと言っても、身边小

説の場合には、氣持が、より一層引きしまるから、そして余り甘い氣持や楽しい氣持でばかりは書いて居られないから、結局、心の修業になるような氣がする。私は時々ジイドの『鎖をとかれたプロメテ』の中の禿鷹の事を思い出すのだが、自分にとっては、身辺小説を書く事は、禿鷹に肝をつつかせるような所もあると思うのである。鷹はそれによって肥える。同時に、結局、それは、私自身にとつても決して悪い結果とならぬ——というのは、自分を鍛えるという事になるような氣がするからである。只、身辺小説を書く事は、自分のまわりの人に、氣の毒なとば、つちりをかける事があるので、その事は苦痛になる。自分自身だけに泥水がかかる場合は、却つて、いい氣にならなくて緊張した顔つきで町を歩く事にもなつてよいと思うのだが、他の人に迷惑がかつたりする事は、決して愉快なことではないのだ。……」

とは、その隨筆のなかで語られる網野さんの言葉であるが、自己の内面や周囲の人々に向ける眼の仮借なさを、正直な筆で綴つた網野さんの作品と思ひ合せると、この言葉は興味深い。

が、私はいま、網野さんの作品、作風について、ここでのべようとしてゐるのではなく、親しく、部屋を訪れた者の一人として、心に残る網野さんの面影を、又、面影によつて呼びおこされてくる私の心のなかの情景のいくつかを、描いてみたいと思つてゐるのである。

網野さんからうけた最初の強い印象として、いまもって眼にあざやかなのは、昭和二十四年の春、音羽の護国寺近くで交通事故にあい、東大分院に入院した父を見舞って病室へこられた時の姿である。荒い紺の大島の着物に、無造作に束ねたゆたかな髪、素肌のままのふっくらした頬、まつ毛の長い大きな瞳が際立って美しく、その表情には、すでに結婚・離婚を経験した中年女性とは思われぬ初々しさがあった。

「近くにありますので……」

網野さんは笑顔と口調に、はにかみを見せながら、私の手に、紙包みののった小さなお盆を渡した。

「これ、塩鮭なんです」

戦後間もないきびしい食糧事情から脱しつつあったとは言え、その頃塩鮭などは未だ珍しい時代である。私は貴重品をうけるようにお盆を手にした。

網野さんはベッドの父に視線を向けて一礼すると、すぐ病室を去っていった。当時、網野さんは、東京最後の大空襲で麴町の家を失ったあとの身を、目白の女子大卒業生アパート内で過していたのである。

この時の網野さんの姿が長い時を経て、私の心にあざやかなのは、それを契機として、網野

さんの作品につよい関心を寄せるようになり、ついで、そのお宅まで訪れることになった事実にもよるのであるが、又一つには、最初の印象として網野さんからうけた初々しさ、素朴さが、その後の長いつきあいのなかで、一向に害われなかったことにもよるのだろう。網野さんは随筆のなかで、「初心忘るべからず」という世阿弥の語句を引き、

「能の人たちでなく、文学する者にとっても、この世阿弥の言葉は何よりも第一の戒めではあるまいか。また、芸道に就いてだけでなく、全てのことにこの言葉はよき教えとなる。」

と、のべているが、日頃の心構えとして、そうつとめていたこともさることながら、「初心」は、網野さん本来の資質そのものであるかとも思われる。

網野さんが、京都粟田口住まいの志賀直哉氏の門をたたいた二十三歳の時から、七十八歳におよぶ生涯を通じて、深いつきあいを続けた志賀康子夫人は、

「おみえになられた時から、感じの変らぬ方……」

年月の淬のつかない網野さんの姿を、そう語っていられたが、それは一面、年月が変えようもない網野さん本来の個性をあらわす言葉であるかもしれない。

父への見舞いのお礼をかねて私が最初に訪れた網野さんの住居は、女子大アパート内の暗くせまい部屋であったが、それから間もなく住居はゆかりの深い麴町、いまの千代田区内に移った。

網野さんの自筆の年譜によると、「昭和二十五年十一月下旬、九段四の父の焼あとにもどる」とあるが、その家について、網野さんは、次のようにしたためている。

「私はかねて知り合ひの某女流歌人の年下の友人で東大の建築科を出た人が、『頭金さへあつたら家を建つやうにしてあげます』と言つてくれた言葉を忘れなかつた。或る時、少し多額の原稿料が入つた時、辛うじて頭金になるかもしれない額のお金を持つて其の人を訪ねた。父の店兼工場の焼け跡——そこには戦後三年に父の没後であつたが、上の異母弟が或る海軍関係のバラック建て古工場を買つて、移して、妻子と住んで居たのだが、その家のうしろの空地に私の家を建てることを許してくれたので、建てる場所はあつたのだつた。建築家は八坪六合の家を設計してくれた。それは敷地の関係上、奥行きは浅く、間口の広い家となつた。建築家の顔で、工賃は一年以内に払へばよいことになつた。当時の最低単位の建築としては中々上出来な家が建つた。引越した時は私は手持ちの金が不足して、電燈の笠を買ふことも出来ない位だつたが、四度目の母の従姉夫妻が祝いの金を千円くれたので、それで、電燈の笠を二つ買つた。……。私は幸ひ、子供向きの外国本の翻訳仕事などで金が入つたから、工費は一年たたぬうちに返せた。地方へ縁附いて居た異母妹の一人から借用した金も、同じく一年たたぬうちに返却出来た。……」

いかにも網野さんらしく、詳しく記述されたその家へ、私がはじめて訪れたのは、何年頃であ